

朝鮮引揚の語り部を継いだ故早野朝子女史

高知大学名誉教授 大野正夫



早野朝子さんの父は、日本の大手建設会社の技術者として朝鮮北部(北朝鮮)に赴任した。朝子さんは1930年、北部の日本海に面した北部地域の中心の町、咸鏡南道咸興(かんこう)南道・咸興(左図に中心)で生まれる。

父の仕事で住居(社宅)が変わった時もあったが、高等女学校2年生であった15歳の時、咸興で終戦を迎えた。

酷寒の冬を咸興の

社宅で過ごし、翌年5月に咸興から引き揚げのため貨物車で出発したが、元山(写真の下方)で降ろされた。収容所に入れられた後、班編成が組まれた。

そこから徒歩で38度線を越えの苦難の日々が続いた。咸興から12日間、ほとんど食べ物はなく、朝鮮人から、わずかな食べ物を買ひ、着たままの旅をして38度を越えた。38度線越えて南朝鮮には食べ物が豊富で驚いたという。南朝鮮は、釜山に辿りついた。帰国し高知県香南市在住して結婚をして、平穏な生活をしていたが、朝鮮の生活、引き揚げの記録を、絵を描くのが好きだったので、鉛筆でノートの描いていた。そのなから、1970年頃より鉛筆書きの絵を、画用紙へ、カラー版に絵具で描きうつしていった。300枚くらいになり、高知市内で絵画展を開くこともあった。



2014年高知新聞の掲載写真

1982年に北朝鮮で遺骨収集するために「朝鮮遺骨収集促進全国友の会」が結成されて、高知支部長となり県内で20名が会員が集った。全国の北朝鮮帰国者との交流も始まった。早野さんは、絵画展や講演の活動を高知県から県外でも絵画展や講演の活動を行った。しかし朝鮮からの帰国者が高齢になり、友の会は解散し、北朝鮮の状況から、目的を果たせず失意のまま、2022年に92歳で他界した。

しかし1981年9月には、10日間、訪朝の機会があった。社会党(当時)国会議員訪朝団に、高知県選出議員がおり、秘書として同行した。38度線の板門店に向かう途中、土と石ころをこっそりと拾って、持ち帰り、土は広島県の朝鮮遺骨観音像におさめて、石ころは遺族にわたした。友の会は、1997年に解散した。

1990年には、「多くの絵を挿入した『**遙かなる朝鮮38度線**』蔵書版181頁、編集:平和のための大阪の戦争展実行員会、発行:日本機関紙協会大阪府本部から刊行されました。

1981年には、土佐民話の会から、故市麟一郎氏が満洲、朝鮮、台湾から高知に引き揚げた人達の聞き取り調査をしたものものが編集されて、「**わが行くは修羅の山河一高知県引揚者の記録**」蔵書版316頁が刊行された。この本のなかで、早野さんは、196～217頁にわたって咸興の町の終戦前後のソ連軍駐留の約1年間の騒乱とした世情を、15歳の女学生がみた事柄と引き揚げ

体験を克明に書かれている。早野朝子さんの絵とともに、下記に早野朝子さんが語ったことを綴ります。



帰国の道、イムジン川を渡る

「土佐民話」で語られた早野朝子さんの 1945～46 年の北朝鮮

咸興の日々

父は戦後、間もなくソ連軍に連れられて行き、シベリアへ抑留されました。北朝鮮で、母と長女の私、弟と妹に赤ん坊の暮らしとなりました。私の家は社宅で、塀に囲まれて広い庭を畑にして、野菜を育てていました。備蓄した米や缶詰も、かなりありました。会社の知人や会社で働いていた朝鮮人の方から、肉や魚などの差し入れもあり、困窮した生活ではありませんでした。広い私の中には、避難民も受け入れた生活をしていました。街中はソ連兵の暴行が頻発し、ソ連兵が家に押入る危険に、おびえていました。街中の治安が少し良くなると。私は、母は心配しましたが、近くの朝鮮人の写真店に、“写真焼き付け”の手伝いをして、わずかな収入を得ました。

母は、気丈にも、「物乞い！」に行くと言って、知人宅を訪ねて食料品を集めていました。

1946年酷寒の1月に避難民と一緒に過ごしていたことにより、家で発疹チフス患者が出て、私も発疹チフスに掛かり回復したが、妹も感染して、此処にいと家族が全滅すると、母は妹が危篤の状態なのに、荷馬車に乗せてもらい、持てるものを持って、知人の家に移りました。

どこで聞いたか、母はゾウリムシが利くと聞いてきて、下駄箱で捕まえたゾウリムシをおかゆに入れて食べさせました。藁をもつかむ心境だったのでしょうか。妹は奇跡的に回復しました。しばらくして、私達の社宅に戻り、ふたたび避難民と大勢の生活となりました。このような日々を過ごしていて、寒さも和らぎ、緑の山野になった5月に帰国できる通知がきました。

引き揚げの惨状

乗客が貨物社に乗り込み咸興駅を出発する直前に、ソ連軍は貨車数を減らしました。そのため三分の一の人は立たされました。私は立ったまま壁に寄りかかっておりました。南下の主要駅ごとに、長い時間かかって、ソ連軍の許可を得なければならなりません。トイレはその時にしました。ある駅を出て、気づくと列車は逆走していました。線路はあるが、38度線まで列車では行けません。山中で一時停車。皆は列車から飛び出した。そこは元山でした。そこから、歩いて、歩いて。疲れ

て、一回休むと、もう腰があがりませんでした。そのうち、靴が破れて、裸足に布を巻いて歩きました。38度線近くになると、新しい電柱が立っていました。皆が俄然元気になりました。国境線まで二キロという村に夕方着きました。河原には、2千名くらいの人が集まってそうです。その晩、班長さんが、いろいろ情報を集めてきて、「みんなで、力をわせて、川を渡ろう」。ソ連兵が寝ている夜明けの二時頃に川を渡ることに決まった。集落にもどって、母がどんぶり一杯、おかゆをもらってきた。なけなしのお金を払い、納屋で休みました。久しぶりに藁がベッドのような感じで、私はマリアでなくなった「アリラン」の歌が上手な友達を思い出して、ひそかに声を偲ばせて歌いました。やがて、出発の時間がきました。心のなかには、「38度線を越えんるんだ」と勇氣凜々となっていました。私はリックを背負った4歳3女の妹を背負い、二女の妹も小さいリックを背負い、母は赤ん坊を背負って出発をしました。班長さんは案内人を雇い、ソ連兵が寝ているか確認に行き、帰るまで藪のなかで息をひそめていました。多くのひとがいるのですが、咳一つしませんでした。裏山を這いあがり、「川に入れ！」の号令で、暗夜のなか、家族の名を呼びながら、じゃぶ、じゃぶと川の中に飛び込みました。川を渡り、ポプラの木が生えている土手に辿りつきました。「さあ、越えたよ」と案内人が言うと、皆、へたへたと坐り込み、立っているひとはいませんでした。

班はここで解散し、各人、4km先の所に駅があり、歩いてゆきました。私達は、ススケタ顔に飯盒をさげ、裸足には、ぼろきれを撒いており、髪はふり乱れ、まるで乞食のような恰好でした。それをジープの上からアメリカ兵が写真を撮っていました。



釜山かた引揚船、高知に着く

南朝鮮は、物資が豊かでした。母は何と替えたか知りませんが、巻きずしとヨモギ餅を買ってきました。ここでテントに入れられて、DDTの消毒を受けました。ここから京城行きの列車には乗るにはお金がいます。私は、「さあ、困った」と思った時、母は切符を持ってるひとの後にさっと並び、私達を呼びました。「切符をみることがない」と、母は気づいたのです。母は、いつでも、気転が利くひとでした。京城から、また、母は何かをお金に替えて、釜山行きの汽車に乗りました。咸興から12日目に釜山につきました。

引揚船

5月初旬、釜山の収容所にしばらく居て、引揚船で九州の仙崎へ着きました。船に乗った時、アナウンスがあって、「ソ連兵に暴行された者は、検診するから申しこんで下さい」と言うアナウンスがありました。仙崎港には、会社関係の方が迎えに来てくれました。母が電報を打ったのでしょう。父はまだ帰国していないと言われました。1年後に、やせこけた父がシベリアから帰ってきました。朝鮮はひどいと思っていたので、「おそらく皆死んだ！」と思っていたと喜んでいました。会社の上司の里が高知であり、

そこでお世話になっておりました。

私が一番言いたいことは、死んだ人達のことです。この人達は死人に口なしです。そこで、私達がせめて記録に残したい。死んだひとの死にざまを残したいと考えたわけです。

北朝鮮で亡くなった人は、約 25,000 人といわれています。5 人に一人は死んでいるというわけです。私達が生きている間にせめて墓参をしたい、日朝の友好親善もはかりたいという願いから「朝鮮遺骨収集促進全国友の会」が設立されました。全国で 350 名の会員となりました。20 名の会員で、高知県支部の仕事を私がさせていただいています。